

# 生きてさえいれば、 楽しいことは、 いくらでもある！。

36歳のとき、交通事故で右足を切断した岡崎さん。  
意識を変えたのは、乙武洋匡わたけ ひろたかさんの著書『五体不満足』。  
自分にはないのは、片方の足だけ。  
まだ、頑張れるはず。何かできるはず！。  
仕事も、遊びも、スポーツも  
真剣に取り組む岡崎さんにお話を伺った。



おかざき・たかし  
岡崎 孝志さん  
(46歳・大野原)



平成16年、知的・身体障害者通所授産施設としてスタートした「ワークハウスアダージョ」。「どんな障がいがあっても、地域の中で暮らしたい」そんな願いを持って活動を続けている。

(社)おおの福祉会  
ワークハウスアダージョ  
廿日市市大野二丁目3番18号  
問合せ ☎0234



「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「麻酔の影響で、意識がはっきりしていませんでしたが、病院のベッドで足が無くなったのを実感したとき、誰もいない個室病棟で一人、夜中に思いっきり泣きました」と岡崎孝志さん。36歳のとき、交通事故で右足を太ももから切断。しかし、泣いたのはその日だけで、次の日からは頭を切り替えたという。

「足がなくなったら」と自覚した時、  
1日思いっきり泣いた！。  
だけど、泣いたのはその日だけ。  
次の日からは頭を切り替えた！。

シッティングバレーボールの一部が常に接触したまま行う6人制バレーボール。サイドに臀部(でんぶ)の一部分が常に接触したまま行う6人制バレーボール。サイドに臀部(でんぶ)の一部分が常に接触したまま行う6人制バレーボール。サイドに臀部(でんぶ)の一部分が常に接触したまま行う6人制バレーボール。